

第 2 章

課題研究

1 研究の概要

(1) テーマと目的

テーマ「キャリア発達を促すための協同学習を活用した授業実践」

1年次は、卒業後の生徒が直面する可能性が高い課題解決を図るために、意図的に授業に協同学習を取り入れて、課題解決へ向けた指導法を検討するという目的で、全員が協同学習を取り入れた授業を行うという取り組みを行った。その結果、生徒同士の関わりが増え、コミュニケーションが増えるという成果が表れた。その一方、生徒の実態差によって理解力や行動力のある生徒が活動を主導しやすくなり、活動に時間がかかる生徒が受け身で学習するようになるという課題が明らかとなった。また、教職員からは、協同学習の理解が難しく、授業にどのように取り入れてよいのかが分からないという声も多数挙がっていた。

これを受けて2年次は、協同学習の5つの要素や協同学習スキル、配慮事項などをまとめた「協同学習授業マニュアル」を作成した。これをもとに、教職員でグループを組み、各教科・形態に適した協同学習の取り入れ方の検討及び課題解決に向けた指導法の検討を重ねた。その結果、協同学習の5つの要素を取り入れた数が大幅に増加し、生徒自身が役割を果たしたり、仲間を意識したりして学習活動に取り組む様子が増えた。一方、1時間の授業の中に5つの要素すべてを取り入れることができていない授業があったり、個別の課題を解決するための指導がうまくできないこともあったりした。

ここまですり振り返ると、効果的な協同学習によって生徒の成長に結びついたこともあったが、協同学習の考え方に基づく授業の設計が不完全な内容であるがゆえ、生徒個々の課題に対して十分な指導ができなかったこともあった、と言える。そこで今後は、生徒個々の課題、集団の状況、単元・題材や授業のねらいなどと、協同学習の5つの要素を照らし合わせた上で、授業づくりに臨むべきではないか。それができれば、課題解決力やコミュニケーション力の伸長、すなわちキャリア発達を促すことができるのではないか。

こうした仮説のもと、3年次の今年度は、生徒のキャリア発達、課題解決力やコミュニケーション力の向上を特にねらいとした集団指導による授業場面において、協同学習の5つの要素すべてを効果的に取り入れつつ、個々の課題に応じた指導ができる授業づくりを目指す。なお、得られた成果は、「知的障がい教育におけるキャリア発達を促す協同学習の実践（仮称）」として、実践集にまとめることにする。

(2) 研究仮説

協同学習の5つの要素を適切に盛り込んだ授業を行うことで、生徒の課題解決力やコミュニケーション力を伸ばし、キャリア発達を促すことができるのではないか。

(3) 研究の方法

① 個人による授業研究

各学年内で担当する授業を割り振り（表1）、一人1回の授業研究を行う。その際、昨年度の「協同学習授業マニュアル」や「グループ研究の成果と課題」をもとに、1コマの授業の中で協同学習の5要素すべてを盛り込むよう計画する。「協同学習用学習指導案（昨年度までの略案・細案をもとに様式を作成する、別紙1）」を用いた研究授業を年に1回行う。なお、研究授業前の授業で協同学習として実践したこと、研究授業後の授業で協同学習として実践したことをそれぞれ「実践レポート（別紙2）」にまとめ、研究授業と連動して授業づくりをすることにより、教職員の協同学習に関する授業スキルを高めるとともに、生徒のキャリア発達を促進させる。研究授業の際は学年の教職員が必ず参観し、「参観者アンケート（別紙3）」を記入し授業者に渡す。また、授業後や学年部会において、授業者に意見や助言を伝える。進路指導で外勤等の職員は、助言に徹する。

		1年所属	2年所属	3年所属
国語		中市	矢倉	田中(博)
数学		西脇	森山	初山
芸術	音楽	石田		鐘ヶ江
	美術	泉谷		
保健体育		海田	田中(龍)	山本
生活単元学習		住谷、村瀬、高山	高田、工藤、上村	岩城、石川
作業学習	窯業科 産業科	内田		亀田
	農業科	小原	成田、津村	
	生活家庭科 家庭総合科	小林	木田	

表1 個人授業研究 担当一覧

② 教科・形態部会によるグループ研究

個人による授業研究でまとめられた「協同学習用学習指導案」と「実践レポート」を各教科・形態部会（所属職員は表2のとおり）で集め、これらをもとにその教科・形態における協同学習の成果と課題を明らかにし、「まとめのレポート（別紙4）」にまとめていく。

		1年代表	2年代表	3年代表
国語部会		小原	矢倉	田中(博)
数学部会		西脇	森山	初山
芸術	音楽部会	村瀬	石田	鐘ヶ江
	美術部会	内田	高田	泉谷
保健体育部会		中市、高山、海田 内田、住谷	田中(龍)、山木	山本
生活単元学習部会		住谷、中市、村瀬 高山、海田、西脇	木田、石田、矢倉 森山、工藤、高田 上村	岩城、鐘ヶ江 泉谷、田中(博) 石川
作業学習部会	窯業科 産業科	内田、飯嶋	田中(龍)	亀田、穴田
	農業科	小原	成田、津村、竹花	山本、関口
	生活家庭科 家庭総合科	小林、出村	木田、青山	初山、藤倉

表2 教科・形態部会所属一覧（グループ研究）

③ 実践集の編さん

①で作成された「協同学習学習指導案」のいくつかと、②で作成された「まとめのレポート」は、ほぼそのままの形で実践集として編さんする。詳しくは別紙5の発刊計画に基づき行う。

(4) 研究の推進日程

個人授業研究は、5～12月の中で各自が計画を立てて行う。「協同学習用学習指導案」と「実践レポート」は、作成するごとに教科部会及び形態部会のチーフに提出する。表2の教科部会及び形態部会において、提出されたものをもとに実践集の編纂を進める。

教科部会 (国語、数学、音楽、 美術、保健体育)	6月27日(火)、9月15日(金)、10月6日(金)、 11月27日(月)、1月16日(火)、2月7日(水)
形態部会 (生活単元学習、作業 学習)	6月9日(金)、9月15日(金)、11月28日(火)、 1月16日(火)、2月8日(木)

表3 教科部会及び形態部会の会議日程

○学年 ○○科 学習指導案

1 授業のねらい

(単元の目標)

- ・ ～～～～～～
- ・ ～～～～～～

(本時の目標)

- ・ ～～～～～～
- ・ ～～～～～～

2 生徒について

- ・ ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
- ・ ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
- ・ ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

学習集団の実態や特徴を簡条書き

3 指導計画

第1回 ○月○日 : 前時の復習、○○を用いた△△の学習

第2回 ○月○日 : ○○を用いた△△の学習 2回目 (本時)

第3回 ○月○日 :

この程度の概要を記す

4 本時の展開

	学習活動	生徒の活動	教師の活動	教材教具
導入 ○分	・ ～～～	・ ～～～～～	・ ～～～～～～ <協同学習の要素や配慮事項>	
展開 ○分	・ ～～～	・ ～～～～～	・ ～～～～～～ <協同学習の要素や配慮事項>	
整理 ○分	・ ～～～	・ ～～～～～	・ ～～～～～～ <協同学習の要素や配慮事項>	

5 指導上の工夫

- ① 互恵的な相互依存関係
.....
- ② 対面的なやりとり
.....
- ③ 個人としての責任
.....
- ④ 協同学習スキル
.....
- ⑤ チームの振り返り
.....

協同学習の5要素それぞれは、どのような意図でどのような活動として盛り込んだのかを説明する。

6 指導の効果

.....

7 今後の課題

.....

授業後に参観者からのアンケートをもらい、それも踏まえつつ授業者が授業を振り返って記述する。

6には、5要素を取り入れた活動に取り組ませたことによる具体的な生徒の変化・成長（キャリア発達の様子）を書く。

7には、5要素を取り入れたことで見られた生徒の課題、そこから考えられる5要素の取り入れ方（授業づくり）の改善・工夫（さらなる教育効果をあげるために考えられること）を書く。

この2項目が、事実上の授業の評価となる。

※ 授業を振り返って

昨年度の「振り返りレポート」と同様に、授業全般をとおしてよかったところ、改善すべきところを記入する。

実践レポート

- ① 互恵的な相互依存関係
.....
- ② 対面的なやりとり
.....
- ③ 個人としての責任
.....
- ④ 協同学習スキル
.....
- ⑤ チームの振り返り
.....

協同学習の要素それぞれを、どのような意図でどのような活動として盛り込んだのか、その結果どうだったのかを記載する。

授業参観者アンケート

記入者：	(学年)	授業者：
協同学習（各要素）についての評価		
授業を通しての感想（良かったところ・改善点など）		

※ 協同学習の 5 つの要素

- | | | |
|----------------|--------------|--------------|
| ① 「互恵的な相互依存関係」 | ② 「対面的なやりとり」 | ③ 「個人としての責任」 |
| ④ 「協同学習スキル」 | ⑤ 「チームの振り返り」 | |

※ 記入次第、授業者まで提出をお願いします。

まとめのレポート

(1) ○○の指導内容や特性

知的障がい教育（高等部）におけるその教科・形態の指導内容や特性について、学習指導要領等を参考に解説する

(2) ○○における協同学習の授業づくり

知的障がい教育（高等部）におけるその教科・形態の指導内容や特性に合わせた、協同学習の5要素の取り入れ方について、ポイントをまとめる

(3) ○○で協同学習を取り入れるメリット

(2) をすることで期待される効果（キャリア発達の効果）についてまとめる

(4) 課題点

以上をもっても、課題として考えられること、またその改善の方策として考えられることについてまとめる

「知的障がい教育におけるキャリア発達を促す協同学習の実践」（仮称）の発刊について

平成 29 年 5 月 12 日

研修部

1 目的

平成 28 年度の研究成果である「協同学習を活用した主体的・対話的で深い学び」の考え方に基
づいた教育の在り方について、地域の特別支援教育のセンターとして積極的に発信する。

2 発刊時期

平成 30 年 4 月（原稿〆切を研究紀要と同じとする）

3 内容・構成

はじめに（校長）

第 1 部 理論編

第 1 章 キャリア発達とは

第 2 章 協同学習とは

第 3 章 キャリア発達を促す協同学習

第 4 章 本校の取り組み（導入経過～今後の課題）

第 2 部 実践編

第 1 章 教科指導

1 国語

2 数学

3 音楽

4 美術

5 保健体育

第 2 章 領域・教科をあわせた指導

1 生活単元学習

2 作業学習

執筆者一覧

おわりに（教頭）

4 作成

- ・第 1 部は、平成 28 年度までの研究紀要や「キャリア教育のすすめ」、「協同学習マニュアル」を参考・引用して、研修部が作成する。
- ・第 2 部は、平成 29 年度校内研究（課題研究）において、各教科・形態部会で作成した「まとめのレポート」と、各授業研究担当者が作成した「協同学習用学習指導案」を載せる。

5 送付・発信

- ・PDF 化し、本校ホームページに掲載する（研究紀要と同様の扱い）。
- ・CD-R に焼き付け、研究紀要送付先および近隣地域の関係機関に送付する。
- ・可能な範囲内で、雑誌掲載など様々な手段で研究成果を発信する（例えば『特別支援教育研究』（東洋館出版社）の「実践レポート」など）。

<第2部の構成詳細>

1 国語

1 国語における協同学習

(1) 国語の指導内容や特性

国語の授業は、漢字や文法といった基礎的な学習のほか、「聞く・話す」「読む」「書く」の観点で…

・
・
・
・

～教科・形態部会が作成する～

(ここと「まとめのレポート」の項立てを同一にする)

その教科の指導内容や特性と、それに合わせた協同学習の要素の取り入れ方、そうすることで期待される効果、残る課題などを1ページ程度のレポートにまとめる。

2 実践例

① (授業名)

(1) 授業のねらい

.....

(2) 生徒の様子

.....

(3) 指導計画

.....

(4) 展開

(本時の展開)

つづく

～各授業者が作成する～

(ここと「協同学習用学習指導案」の様式を同一にする)

各先生が研究授業で作成した指導案を載せる

(1) 授業のねらいは、単元と本時の目標を簡条書きにする。

(2) 生徒の様子は、人数や簡単な実態を簡条書きにする。

(3) 指導計画は、何回目におおよそ何を行うかを簡条書きにする。

(4) 展開は、本時の展開部分を載せる。

つづき

(本時の展開)

(5) 指導上の工夫

……協同学習の要素を解説……

(6) 指導の効果

.....

(7) 今後の課題

.....

(5) 指導上の工夫では、協同学習の要素をどこにどのように盛り込んだのかを解説する。

(6) 指導の効果では、協同学習の要素を盛り込んで授業をしたことによる効果(生徒のキャリア発達の様子、変化等)を述べる。

(7) 今後の課題では、さらなる工夫によりさらなる効果をあげられると考えられることを述べる。

2 研究の実際

(1) 個人研究

① 個人研究の手順

各学年で全教科の研究授業ができるよう研修部で割り振りをした。実践レポート①、研究授業、実践レポート②の流れを極力一つの単位で行うことを前提としたが、授業の日程上、都合がつかず、実践レポートを提出できない人や、教科で行う際は次の単位に入ってしまう人もいた。実践レポート①には協同学習を行った中での改善点を入れ、それを踏まえて研究授業を実施した。研究授業では参観者アンケートを用いて、他の教員から協同学習の5要素だけではなく、授業の良かったところや改善点なども出してもらった。その結果を取り入れた授業を行い、実践レポート②とした。そうすることで、各自、協同学習についての理解が深まり、授業づくりが上達していった。

② 協同学習マニュアルの改訂

協同学習を行うにあたって昨年度からマニュアルを作成し、配布した。全体研修の中で協同学習スキルについての説明やマニュアルの具体例を掲載してほしいとの要望があったため、改訂を行った。今年度版は、協同学習の授業づくりについてより細かく説明したり、協同学習の5要素の各要素で具体例を挙げたりして、知的障がい教育における協同学習を行う際のポイントを記載した。また、「協同学習の5要素」と「協同学習の進め方8ステップ」の関連を示した表を掲載することで個人研究の推進に役立ったと考える。

③ 授業研究の推進

指導案や授業を見てみると、「③個人としての責任」は生徒それぞれに役割を与えたり、話し合いの中に条件を付けたりすることで成立していることが多かった。また、「⑤チームの振り返り」は、教師からの振り返りだけではなく、生徒がワークシートなどを活用して振り返りをすることができていた。だが、「①互恵的な相互依存関係」の集団を運命共同体として位置付けることに難しさを感じている人が多いようであった。

全体を通して、昨年度より協同学習の5要素を取り入れて授業を進めることができていた。単元を担当する時期や題材の関係で協同学習を行うことに難しさがあるように感じたが、遂行することができた。

(2) グループ研究

① グループ研究の手順

上記の個人研究で割り振りされた「国語」「数学」「音楽」「美術」「体育」「生活単元学習」「作業学習」の7つの教科・形態から、各教科・形態部会で協同学習に関する話題が挙がるように働きかけ、各部会チーフにも協力していただいた。

教科・形態に合わせて個人研究の実践を持ち寄ることにより、部会の中で「協同学習の成果と課題」を話し合うことができるのではないかと、そして、例えば「国語の教科における協同学習とはどうあるべきか」など、その教科・形態ならではの特色が表れたレポート材料が少しずつ集まり、最終的にグループ研究として教科・形態の成果と課題が「まとめのレポート」として出来上がっていくのではないかと考えた。

② まとめレポートの作成

各教科・形態部会において随時まとめのための話し合いがなされ、それぞれ個人の授業

研究から7つの教科・形態に分かれ、レポートをまとめてもらった。

「国語」「数学」などの教科については、協同学習のメリットは大いにあったが、同時に基礎的な学習内容の向上が改めて浮き彫りになった。「美術」「体育」などの教科については、実技の時間を確保しつつ、協同で考えをまとめたり何かを作り上げたりするという工夫もできた。「生活単元学習」については、合わせた教科の強みを最大限に生かし、教材・教具や学習展開を工夫することによって、協同学習による様々な効果が現れた。

「作業学習」については、将来働くことに焦点を当て、個々の成果と課題を協同で毎回振り返りながら次の作業につなげたり、自分の動きが作業として適切かどうかを周りの仲間と確認するなどの効果が現れた。ただし、個人の能力差が顕著に現れるため、指導者の支援の方法にもより一層の工夫が必要だったと考える。

(3) 実践集の編さん

協同学習は、仲間との話し合いを繰り返すことでコミュニケーションの方法を学び、仲間と協力・協働して課題を解決していくという手段・方法を身につけていく学習である。このように習得した力は、卒業後の変化の激しい現代社会を生きる力となる。このように考えると、本研究で行われている協同学習は、キャリア教育と関連性が明確にあるといえる。

協同学習の実践集として、教科・形態別のグループ研究のまとめのレポートを編さんすることで、実践する上での成果や課題が教科・形態の特性を比較でき、協同学習の理解が深まった。また、協同学習の5つの基本要素をすべて取り入れることでより高い教育的効果も望めることから、この実践例として教科・形態別の個人研究で行われた実践レポートと5要素をすべて取り入れた授業の指導案の一例も合わせて編さんした。

近隣の学校にこの協同学習の実践集を広めることで、協同学習の理解が深まり、新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」を実践するための一助となれば幸いである。

(4) 校内研修の実施

協同学習マニュアルの改訂を受けて、改めて協同学習についての学習会を開いた。主に協同学習の押さえについて取り上げ、本校の協同学習とは、生徒が相互に学び合う授業、話し合いや助け合いを中心とした授業、共通の問題解決を目指して互いの考えを出し合い、学習内容の理解習得を目指す位置付けた。これらを実践していくことで期待できることは、知識・技能の理解・習得、コミュニケーション能力の向上、課題解決力の向上、主体性・意欲・姿勢の向上であり、さらにはキャリア発達を促すことにつながるということを教職員全体で周知することができた。

次に、キャリア教育についての共通理解を図るための学習会を開いた。内容としては、キャリア教育の必要性、キャリア教育の解釈、キャリア教育で伸ばす力について取り上げた。キャリア教育では、将来の職場で生徒たちが困らないように働く力だけを育成するのではなく、いろいろな場面で生きていくために必要な力を育成しなければならない。いろいろな場面で生きていくために必要な力とは、生活する力、コミュニケーション力、人間関係を築く力、国語や数学の力などがあり、多くの力が必要であることを学習会で確認することができた。

次年度は、学習会がより活発に進められるように、事前に教職員一人ひとりにアンケート調査を行い、要望の多い内容や早急に取り上げるべき内容等を精査した上で、学習会のテーマを決定し実施していく。

以下、資料1として個人研究で取り組んだ実践レポートと学習指導案を、資料2としてグループ研究で作成した各教科・形態のまとめのレポートを、資料3として改訂した協同学習マニュアルを掲載する。

3 成果と課題

(1) 課題研究の進捗状況から見る成果と課題

「キャリア発達を促すための協同学習を活用した授業実践」をテーマとし、個人授業研究とグループ研究に取り組んできた一年であったが、それぞれの研究の方法や調整に不具合があり、うまく機能しないこともあった。しかしながら、「協同学習授業マニュアル」を改訂したり、学習会を開催したりするなどして、教職員一人一人が協同学習に対する理解を深め、授業実践を繰り返し、生徒のキャリア発達を促すことができるよう、できる限りの工夫もしてきた。その結果、協同学習5つの要素すべてを盛り込んだ授業実践が研究授業によってなされ、教科別の指導、領域・教科等を合わせた指導ごとにその要点をまとめ、実践集の編さんまで至ることができたのは、大きな成果と言えよう。

ところで、研究を終えるにあたって、教職員全員（43名）にアンケートを実施したが、結果は表1のとおりである。

5：はい 4：どちらかといえばはい 3：どちらでもない 2：どちらかといえばいいえ 1：いいえ

	設問	回答				
		5	4	3	2	1
1	個人として、協同学習というものについての理解を深め、うまく授業を行うことができたと思いますか。	5	18	12	3	1
2	協同学習の5要素をすべて盛り込んだ授業を行うことによって、教育効果はあったと思いますか。	6	23	9	2	1
3	協同学習を行うことによって、生徒のコミュニケーション力を向上させることができたと思いますか。	7	25	7	1	1
4	協同学習を行うことによって、生徒のキャリア発達を促すことができたと思いますか。	3	18	16	3	1
5	研究授業だけではなく、普段の授業から単元（題材）を選び、協同学習を適宜取り入れることができましたか。	7	21	6	5	1
6	協同学習は「主体的・対話的で深い学び」を実現するための一つの手法と言えますか。	13	21	5	0	1

(表1 協同学習に関する教職員アンケートの集約結果)

また、自由記述欄では、「全ての学習で協同学習を行うことは難しいが、学習内容によっては教育的効果が高いと思った。」「場面に応じて設定することで効果が得られると感じた。」といった意見があった。

このように、研究として協同学習に取り組んだことをきっかけとして、普段の授業から協同学習を意識して行っていくことができてきた。これを踏まえて、協同学習を研究のための単発の授業として行うのではなく、一単元あるいは年間の授業計画の連続性・系統性の中で数回意図的に設定して行うというように、教育課程という視点からも位置付けられるようになるとうい。これらができれば、より一層、生徒の課題解決力やコミュニケーション力を伸ばし、キャリア発達を促すことができるものと考えている。

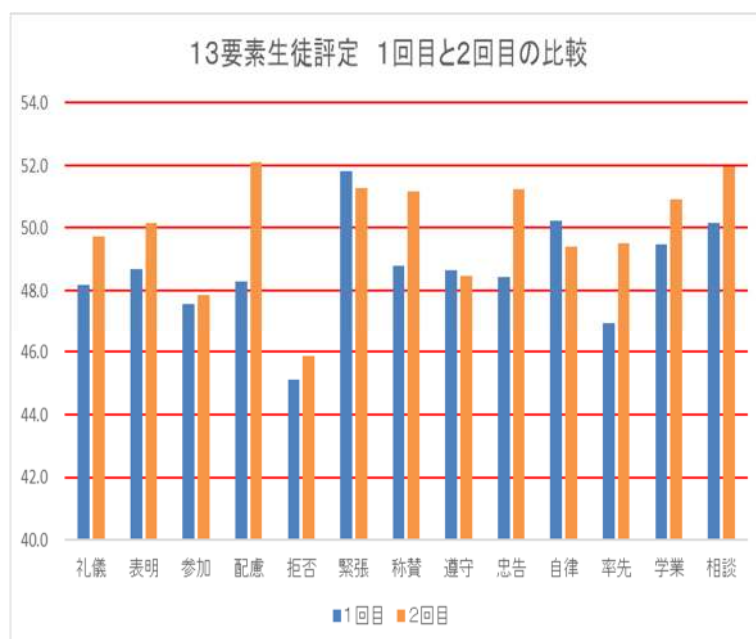
一方で、協同学習を取り入れた授業がうまくできなかったという教職員もいたことから、今後も教職員一人一人が協同学習に対する理解と実践を一層深めていく必要がある。

(2) 子ども理解支援ツール「ほっと 2014」の実施結果から見る成果と課題

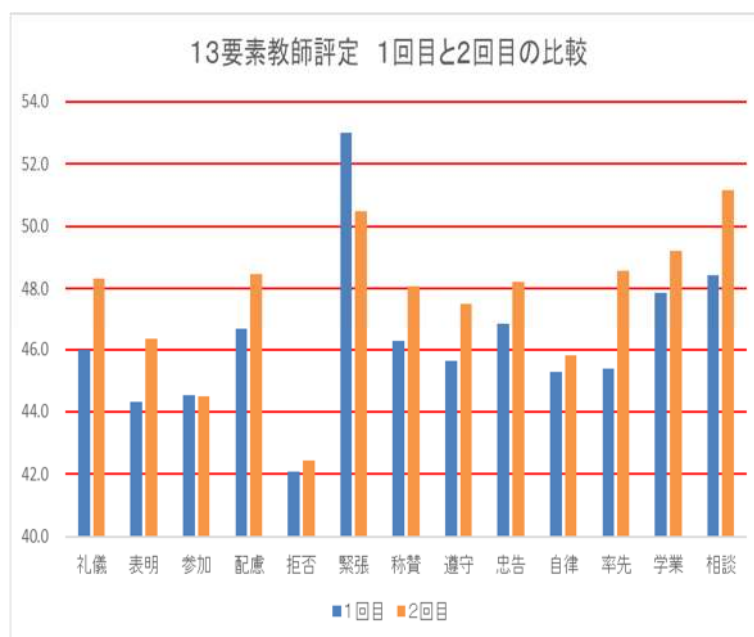
今年度当初の研究計画にはなかったが、生徒と教師にある調査を行うことで、生徒のコミュニケーション力の変化を捉える試みを行った。それは、北海道教育委員会と北海道医療大学が共同で開発した子ども理解支援ツール「ほっと 2014」の実施による調査である。これは、「振り返りシート」と呼ばれるシートに記載された 21 項目の質問に生徒と教師が回答し、データ入力（集計）することで、その生徒のコミュニケーションに関わる力（13 要素、表 2 参照）がどの程度かわかるというものである。協同学習による実践がスタートし始めた 6 月と、実践が積み重ねられてきた時期である 12 月の計 2 回実施することにより、協同学習の実践の効果も検証することにした。

13 要素		略称	要素の説明 (コミュニケーションスキル)
1	挨拶や感謝	礼儀	挨拶や「してもらったこと」への感謝ができる
2	発言や説明	表明	意見や欲求を主張できる
3	仲間づくり	参加	対人参加や、仲間と協調することができる
4	思いやり	配慮	相手への配慮や親切、援助ができる
5	拒否	拒否	断ることや、他者から無理な働きかけにやめると言える
6	緊張	緊張	緊張や不安によって話せなくなることがある
7	称賛	称賛	相手を褒めたり喜ばせたりすることができる
8	ルールやモラル	遵守	規律や秩序を維持したり、不適切な行為を謝罪できる
9	助言や注意	忠告	社会的な望ましさを促進する働きかけができる
10	自律	自律	協調性や我慢などの自律的な行動ができる
11	リーダーシップ	率先	集団をまとめることなどリーダーシップ行動ができる
12	学業	学業	学習に関連した望ましい行動ができる
13	相談	相談	相談や自己開示ができる

(表 2 「ほっと 2014」で測ることのできるコミュニケーション 13 要素)



13要素	1回目	2回目	2回目-1回目
礼儀	48.2	49.7	1.6
表明	48.7	50.2	1.5
参加	47.6	47.9	0.3
配慮	48.3	52.1	3.8
拒否	45.1	45.9	0.7
緊張	51.8	51.3	-0.5
称賛	48.8	51.2	2.4
遵守	48.6	48.5	-0.2
忠告	48.4	51.2	2.8
自律	50.2	49.4	-0.8
率先	47.0	49.5	2.5
学業	49.5	50.9	1.5
相談	50.2	52.0	1.8



13要素	1回目	2回目	2回目-1回目
礼儀	46.0	48.3	2.3
表明	44.3	46.3	2.0
参加	44.5	44.5	0.0
配慮	46.7	48.4	1.8
拒否	42.1	42.4	0.3
緊張	53.0	50.5	-2.5
称賛	46.3	48.1	1.8
遵守	45.6	47.5	1.9
忠告	46.9	48.2	1.4
自律	45.3	45.8	0.5
率先	45.4	48.6	3.2
学業	47.9	49.2	1.4
相談	48.4	51.2	2.7

(図表1 「ほっと2014」の実施結果①)

① 全体的な傾向

基準となる偏差値50を上回った要素は、生徒評定では1回目が3、2回目が7と4つ増した。教師評定では1回目が1、2回目が2と1つ増した。生徒の方が、自分のコミュニケーション力が上がったと感じている人数が多い。教師評定では偏差値50を下回っている項目の方が多いものの、11個の要素で前回より数値が上がっていることから、教師もそれなりに生徒のコミュニケーション力は向上したと捉えているという傾向が伺える。よって、協同学習の実践による教育効果はあったものと考えることができる。

② 高評定・低評定項目から見える本校生徒の傾向

2回の調査でいずれにおいても、生徒評定、教師評定ともに偏差値50を上回ったのは「緊張」であり、最も下回ったのは「拒否」であった。すなわち、「緊張や不安によって話せなくなることがある、ということはありません生徒の方が若干多い。」ものの、「断ることや、他者から無理な働きかけにやめてと言うことができない生徒が若干多い。」ということを示している。

③ 生徒評定・教師評定の差から見える本校の課題

2回目の調査の結果、生徒評定で最も伸びたのは「配慮」で13要素中2番目の高さだが、教師評定では6番目であった。このことから、「生徒は意見の主張や助言、思いやりのある行動ができるようになったと自己評価した者が多かったが、教師は必ずしもそう思っておらず、生徒の過大評価あるいは教師の過小評価であるため、両者とも的確に評価できるように普段の学習活動を改善・工夫する必要がある。」ということが読み取れる。

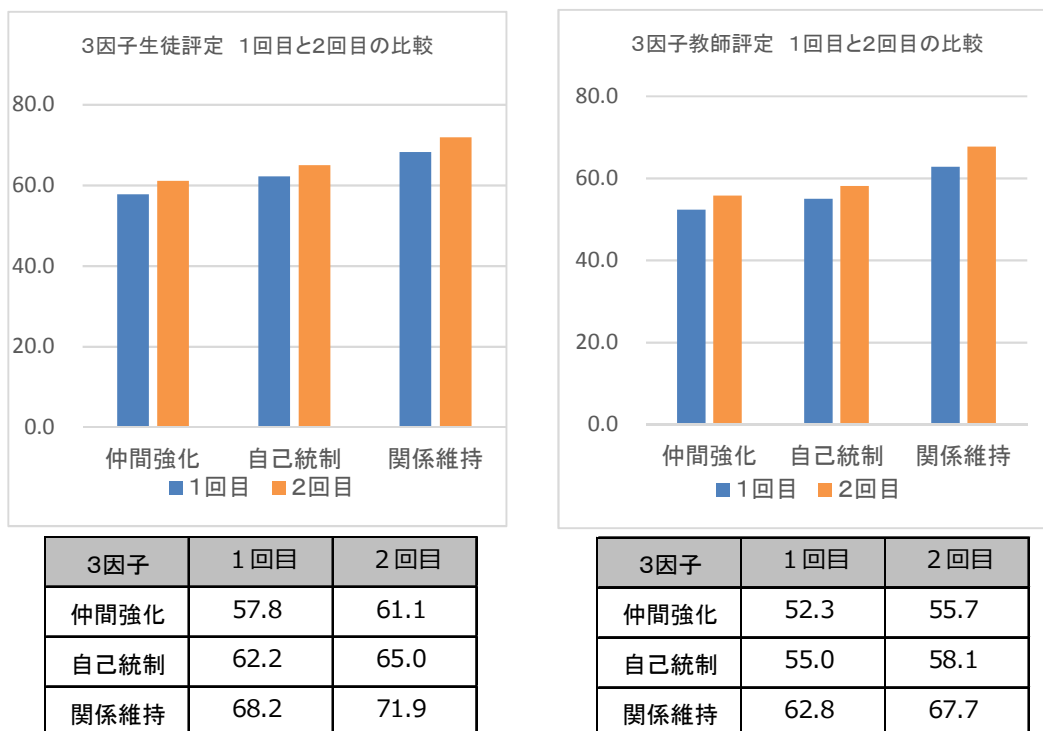
一方、教師評定で最も伸びたのは「率先」で13要素中4番目の高さだが、生徒評定では9番目であり、いずれも偏差値50を下回っている。このことから、「集団をまとめることなどリーダーシップ行動ができると自覚している生徒は少ないが、教師は様々な学習活動を通してこれができるようになってきた生徒が増えたと考えている、しかし生徒評定、教師評定ともに偏差値50以下ということもあり、両者とも的確に評価できるように指導の工夫・改善が必要である。」ということが読み取れる。

④ 因子得点から見る本校生徒のコミュニケーション力

「ほっと2014」では、先の13要素で相関の高い要素同士を因子としてまとめることで、本校の全体的な特徴を3つの因子で把握することができる。

因子	因子の説明
仲間強化	仲間と高め合ったり、影響力のある発言をする力
自己統制	衝動性を抑え、良識に基づく意思決定を行う力
関係維持	他者と良好な関係を保ち、励まし合う力

(表3 「ほっと 2014」13 要素から測ることのできるコミュニケーション3 因子)



(図表2 「ほっと 2014」の実施結果②)

この結果を見ると、生徒評定、教師評定いずれも同様の傾向にあり、生徒評定の方が高い数値を示している。しかしながら、1回目より2回目の方が高い数値となっていることから、コミュニケーション力の全体的な底上げが成されてきたものと読み取れる。最も高かったもの、つまり比較的得意とする力は「他者と良好な関係を保ち、励まし合う力」、一方、比較的苦手な力は「仲間と高め合ったり、影響力のある発言をする力」であると、生徒も教師も捉えていることから、これが本校生徒のコミュニケーション力の実態であると言える。このことは、協同学習スキルが低いレベルで終始している事例が多く、学習の深まり不足と関係している。

(3) 今後に向けて

改訂される学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の視点からの学習過程の改善が求められている。これは、生きて働く知識・技能の習得などにより、新しい時代に求められる資質・能力を育成するため、質の高い理解を図るために学習過程を質的に改善していくことである。本校もこれを進めていかなければならないが、協同学習を行えば全て解決できると安易に考えてはならない。確かに、「ほっと 2014」の結果によって、協同学習をはじめとする本校の教育活動の成果として生徒のコミュニケーション力は高められていることが裏付けられた。

しかし、実際は、十分な協同学習ができていた授業もあれば、まだ未成熟な授業もあった。また、協同学習を取り入れることだけが「主体的・対話的で深い学び」を実現する唯一の方法とは言いきれないはずである。

協同学習においては、生徒が力を合わせて一つの目的を成し遂げるために活動する上では話

し合い活動が多くなるが、これを取り入れた研究授業は非常に多く、そこでは「対話的な学び」ができていたかもしれない。また、生徒の興味関心をくすぐるような題材や教材を用いた授業では「主体的な学び」が実現していたかもしれない。しかし「深い学び」というものについて、我々は深く探求していない。果たして協同学習によって「深い学び」が実現できていたのかどうかを検証するには至っていない。

次年度以降は、今年度、さらにはこれまで3年間の協同学習の実践をベースとしつつも、「主体的・対話的で深い学び」を実現するにはどのような学習過程を組めばよいのかを考え、試行錯誤を繰り返していくことになるだろう。それと同時並行で、生徒のコミュニケーション力をはじめ、内面の変化、キャリア発達を促す授業実践を探究していきたい。これを測るツールとして、「ほっと 2014」などによる調査は今後も継続していきたい。